

膝関節痛の為歩行障害, 55年急性肺炎を合併, 同年4月10日当院入院。Ca 11.3mg/dl, P 2.3mg/dl, Alk-P 1874 mu/ml(骨型), PTH N 末端2860pg/ml (N230~630), C 末端2740pg/ml (N430~1860), % TRP 75%, 骨レ線上, 全身骨陰影の減少, 指骨骨膜下吸収像を認む。骨型副甲状腺機能亢進症と診断し, 6月11日, 右上葉に3.2gの chief cell adenoma を摘出した。Ca-gluconate 静注にもかかわらず術後2週目に Ca は最低5.3mg/dl まで低下した。Ca-gluconate 10g/day, 1α -D₃ 1 μ g より漸増し現在10 μ g/day 使用中なるも Ca 7.5mg/dl, P 2.8 mg/dl と未だ低値。9月施行の Ellsworth-Howard test にて, U-cyclic AMP 増加するも, U-P 増加せず。Ca 上昇遅延の原因検索もかね, 現在血中ビタミンなどを検索中である。又術前, 術後の血小板凝集能にも検討を加えた。

5. 副甲状腺機能亢進症の骨変化に関する硬組織学的検討

栗原 真, 井上駿一, 後藤澄雄
雄賀多聡, 斉藤康夫, 中田好則
(千大, 整外)
霜礼次郎 (霜整形外科)
伊藤晴夫, 真田寿彦, 村上光右
(千大・泌尿器)

5例の副甲状腺機能亢進症に腸骨骨生検を施行し, 硬組織学的検索により得られた骨組織所見とレ線所見及び臨床検査成績との対比検討を行ない, うち骨型の1例は, 副甲状腺摘出術前後の骨組織像の比較検討を加えた。

骨組織像で完全な皮質の海綿骨化, 広汎な骨細胞性骨融解を示す2例では, さらに骨形成面の増加, 類骨形成幅の増大を認め, レ線的にも, 骨膜下吸収, 歯槽硬膜の消失といった典型的所見を有する。一方, 組織変化が軽度の症例でも, レ線上, 皮質の海綿骨化, 骨梁の減少所見が得られ, より詳細なレ線像の検討が必要と思われる。AL-P 値, PTH 値, 腫瘍の大きさ, とくに罹病期間との間に骨組織変化との相関を認め, 血清 Ca, P 値とは, とくに関連はなかった。術後再度生検を行なった1例では, 術後, 骨量は明らかに増加しているものの, 類骨形成幅は更に増大し, 新生骨の石灰化度も低く, 骨軟化が進行しており, Ca, P の絶対量の不足が考えられた。

6. 慢性腎不全における骨シンチグラムについて

中澤了一, 田原和夫, 渡辺幹夫
宍戸英雄, 磯田和雄
(国立佐倉・内科)
榎本和夫, 蜂巢 忠, 柏原英彦
横山健郎 (同・外科)
木村 純 (同・整形外科)
妹尾素淵, 吉田豊彦
(京葉泌尿器クリニック)

慢性腎不全における骨病変の早期発見のため慢性腎不全例61例に骨スキャンを施行した。

内訳は, 非透析28例, 透析例22例, 腎移植例11例である。^{99m}Tc-MDP 10mCi 静注し, 3時間後に全身のスキャンニングを行った。骨X線上で確認がむずかしい症例にも有用であり, 特に肋骨骨折や頭蓋冠の osteolytic lesion の発見に適していると思われた。

7. 多発骨折を起した透析患者への α -D₃ 使用経験

東 伸宣, 鈴木三郎, 鈴木 満
富永和喜 (東葛クリニック)

我々は慢性血液透析施行中, 多発性骨折を起した患者に対し α -D₃ を投与し良好な結果を得たので報告する。症例は当時52歳の女性で昭和48年7月慢性血液透析導入, 導入後約2年間は経過良好であったが51年2月右大腿骨骨折, つづいて右尺骨骨折, 多発性肋骨骨折をひきおこし, 大腿骨は観血的にプレート固定し, 51年10月より α -D₃ 1.5 μ g より開始し3.0 μ g にて維持した。著明な Ca の上昇を認め, AL-P の低下もみとめられた。骨折部は骨癒合が著るしく促進され, 合併症は全くみられなかった。受傷後約1年2カ月後外来通院可能になり, その後良好な経過をたどっている。

8. 長期透析患者に対する 1α -D₃ 少量長期連続使用の効果について

入江 康文, 嶋田俊恒
(千葉社会保険)
小高 通夫, 平澤博之, 小林弘忠
田畑陽一郎, 菅井桂雄, 林 春幸
添田 耕司 (千大・2外)
鹿島 孝 (栄町クリニック)

長期透析患者に対して, 1α -D₃ をホルモンとしての見地から, 維持量的に少量長期間使用した場合の安全性と効果を検討する目的で 1α -D₃ を, 0.25 μ g/day を25例に